

## 1. 研究主題

### 主体的にかかわりあう子の育成

— 課題を追求する授業を通して —

## 2. 主題設定の理由

### (1) 今日の課題から

国際化や情報化、科学技術の発展の 21 世紀を迎え、日本社会のみならず、世界はこれまでにないほど変化・激動の中にある。20 世紀以降、科学技術の躍進、社会や経済の発展から、自由な時間や経済的なゆとりが生まれ、人々の生活様式や価値観は多様化してきた。

一方で、バブル経済の崩壊、核家族化・少子化問題の出現、さらに高齢化社会の到来等で、今、先行きの不透明な厳しい時代となり、本当に豊かな社会とは何なのかが問われている。

そして、学校教育においても、実生活での直接体験の不足、遊びの変容、体力の低下、孤立しがちな人間関係など数々の問題が生じている。

これらの変化する社会の中で、私達は、豊かな人間性や社会性を備え、人間として調和のとれた 21 世紀をたくましく生きていく子ども達を育てる必要がある。

学習指導要領では、子ども達に、知識や技能に加え、学ぶ意欲や、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、いわゆる「確かな学力」を育成することを大切にしている。

そして、この力をベースとして「生きる力」の育成が求められているのである。

学校教育において、「生きる力」を身につけさせるためには、一人一人の個性をかけがえのないものとして尊重し、その伸長をはかることが大切となる。

そのためには、横並び的、画一的な考え方から脱却し、それぞれの子どもにふさわしい学習の仕方や進度、得意な分野があることを理解し、教科学習に留まることなく、子ども達の創造的活動への広がりや追究が課題となっている。

### (2) 児童の実態から

豊かな自然に囲まれ、長い歴史の中で育まれた地域社会で、三世代家族の中で育った子どもが多く、家に帰れば年長から年下まで、縦割りの関係でふれあい、かかわりあうことの多い生活環境にある。

学校では、素直でまじめに話を聞き、物事に取り組む子どもが多い。また、休み時間には運動場や体育館で元気に遊ぶ活発な子どもの姿が多く見られる。

つたえあう力の育成に関わる校内研究の試行錯誤の積み重ねによって、学習する仲間・集団の中で、他を意識してかかわりあう姿、それぞれの思いを自ら伝えていこうとする姿が見られるようになってきた。そして、教科学習の面だけでなく、特別活動の時間においても、他の意見を聞きながら、自分の考えを発言しようといった姿も少しずつではあるが見られるようになってきた。

しかし、一方で、周りの様子が気になり、言いたいことが言えず、一部の児童に頼って

自分の考えを持とうとしない児童，自分の考えを持っていても言葉や行動での表現の苦手な児童などがみられる。自分の考えをどのように持ち，どう表現し，主体的にかかわり合いながら生きる力を身につけていくのかが課題となっている。

### (3) 教育目標から

本校は，3つの教育目標を掲げている。

1. 自分のめあてをもち，よりよく生きようとする子を育てる。
2. 他を認め，思いやりの心をもって接する子を育てる。
3. 地域の自然・文化を愛する子を育てる。

そして，めざす児童像を，

- ・ 自分のめあて，考えを持つ子
- ・ 最後までやりとげる子
- ・ 仲良く助け合う子
- ・ 明るく元気な子

として，教育実践に取り組んできた。

これらの目標に迫るために，「地域・自然に密着し，子どもの体験を生かした活動」が教育課程にいかに関与されるか，子ども達にどのように具現化できるかの検討，「思いやりの心をもち，自らたくましく生きる子をめざして」の研究，総合的な学習における「地域に根ざした特色ある自然・環境に触れさせながら」等の研究が推進されてきた。

平成14年度より，「思いをもち，主体的にかかわる子をめざして」という研究主題を設定し，最もつけたい力を「コミュニケーション能力」として研究が進めてきた。

一昨年度より，副題を「つたえあう力の育成」と定めた。「コミュニケーション能力」を「聞く力」「話す力」に絞り込みながら，一歩ずつ着実に研究を推進していくためである。授業の中でつたえあう「場」を位置づけながら，「話し方」と「聞き方」のスキルアップを図ることで，つたえあう力の向上が図られてきた。

昨年度は，より主体的なつたえあいへと迫るために，スキルの定着と共に，「話したい」「聞いてみたい」という主体的な思いをいかに持たせるのかを中心に研究を進めてきた。

子ども達一人一人の思いを大切にしていけること，子ども達が自ら進んで人や自然，地域社会，そして，文化活動にかかわりを持って取り組んでいくことが，21世紀を生きぬく子ども達の力を蓄えていくことになるだろうという願いのもとに進めてきた実践である。

今年度は，これまでの研究の成果と課題を整理し，主題と副題を新たに設定した。まず，主体的なかかわりあいの中には，個々の思いがすでに存在しているものと捉えた。また，かかわりあうためのつたえあう力をこれまで同様大切にしつつ，各教科，単元のねらいの到達を中心におき，課題を追求する授業を通して主題に迫ることにしたのである。

## 3. 研究の方向(1) 基本的な考え方

### ① 主体性を育む教育への転換

学校教育には，大きく分けて二つの目標があるであろう。

一つ目は，子ども達全員に定着を図る『共通する目標』としての基礎学力，社会性，道

徳性の育成である。

二つ目は、『個に応じた目標』として、子ども一人一人の好きなこと、得意なことといった個のよさを可能な限り伸ばすことである。

つまり、「個々をそろえる共通化」とともに、「個々の違いを認める個性化」のバランスが重要となる。

「個々をそろえる共通化」は、基礎・基本の理解を図ることが中心となる。これまでの教育は一斉学習とともに、いわゆる伝達型教育という点に特徴があった。そこには、日本の伝統的な言語、科学、芸術、スポーツなどの文化的遺産の中で、重要なものを次の世代に伝えるという社会的要請があった。子ども達が教科という枠組みを通して、それらの文化的遺産を知識として、効率よく吸収することを期待したものであった。主として、教師はその伝達者という役割を担い、とかく効率性や計画性が重視されるため、子どもの学習に向かう姿は受動的になりがちであった。

しかし、「個々をそろえる共通化」というのは、基礎・基本の理解によってつけた力をもとに、子ども達一人一人が、その後の学習や生活に主体的に活用できる資質や能力を育てることを根底とするものである。つまり、「個の基本的な資質・能力の確立」に役立ってこそ意義がある。そのためには、伝達型で受動的な教育のよさも残しつつ、創造型で能動的な教育を大切にしていける必要があるだろう。

「個々の違いを認める個性化」の中心にあるのは、自分は何に興味があるのかといった「自分みつめ」と、自分はどんな人間になりたいのかといった「自分づくり」である。これらは、自ら学び、自ら考える個々の思いが十分に生かされた「拡充した個の確立」であると考えられる。「自分みつめ」「自分づくり」では、自ら問題を設定し、試行錯誤を繰り返しながら解決に向かう。日常生活での経験不足や独りよがりの対応で、現実にはさまざまな問題を含むものの、子ども達は、自分の考えや行動を他者と比較検討し、その共通点や相違点に気づき、よりよい関係性を模索する。そして、失敗や成功、悩みや喜び等、さまざまな経験が積み重ねられる。

このような歩みの中で、個々は効力感（学びたくて学ぶ。）、受容感（他者とのかかわり、支えられて学ぶ。）、必要感（目的、納得をもって学ぶ。）、存在感（自己の存在に意義を感じる。）、親近感（課題、相手に親しみを感じる。）といった、思いの拡充を実感する。当然、これらのことは、周囲の友達や人々とかかわる中で、徐々により鮮明に見えてくるものである。

この思いの拡充が、より広くかかわりたい、より深くかかわりたい、よりよくかかわりたいといった「主体的にかかわりあう力」となっていくのであり、子ども達に「生きる力」を身につけさせることが求められている今こそ、主体性を育む教育が必要なのである。

## ② 課題を追求する授業

「課題を追求する」とは、狭義には各教科の学習の「めあてや課題」を解決することであり、広義には「人としての思いや願い」の自己実現を図ることであるといえる。

つまり、各教科の一時間ごとの学習において、学習課題を追求し解決することの積み重ねにより身につけた力が、ひいては自分自身が生きる上での自己実現を迫及し、成し遂げる力となると捉える。

課題を追求する学習を展開する目的のひとつには、基礎的・基本的な内容をより効果的に、より確実に身につけることが挙げられる。課題追求を通して、各教科等の力がしっかり身につく（基礎学力の保障）ということが、学習指導において不可欠である。

その上で、子ども一人一人が自分なりの筋道で、自分なりの学び方を身につけたり、駆使したりして、自己の目的の実現を図ることである。それは、自分の学習のめあてや課題の解決を図ることであり、「～が分かるようになりたい」「～について知りたい」「～ができるようにしたい」といった、一人一人の学力向上への思いや願いからくる。こうした思いや願いを子ども達が本来持っている向上心や知的好奇心、探究心を生かしながら、よりよく実現させていくところに学校教育の役割がある。

また、課題を追求した結果や成果だけでなく、課題追求のプロセスが重視されなければならない。学習においては、課題追求に取り組むそのこと自体に意義や価値を見出すことができる。子ども一人一人が学習の対象（物、事柄、人）に主体的にかかわりながら、課題を解決するための方法や能力などを具体的に身につけていくという意味において教育的な価値がある。

子ども一人一人が自ら課題を追求する姿とはどのようなものか明らかにしていく必要がある。自ら学んでいる子ども達は、学習の課題追求場面において、次のような資質や能力を発揮しながら取り組んでいるものであろう。

- ① 自分は何を（何について）学習するのか、学習の目的や課題、対象を明確に意識していること。
- ② ①を受けて、自分はどのようなことをどのような方法で取り組んでいくのか、課題解決への見通しを持っていること。
- ③ 一人で学ぶ方法や能力などを発揮して問題解決していること。

したがって、子ども達にこれらの資質や能力を身につけさせていくことが、課題を追求する授業に求められていると考える。

## （2）研究仮説

上記の基本的な考えをもとに、次のような仮説を設定し、研究を進めていくこととする。

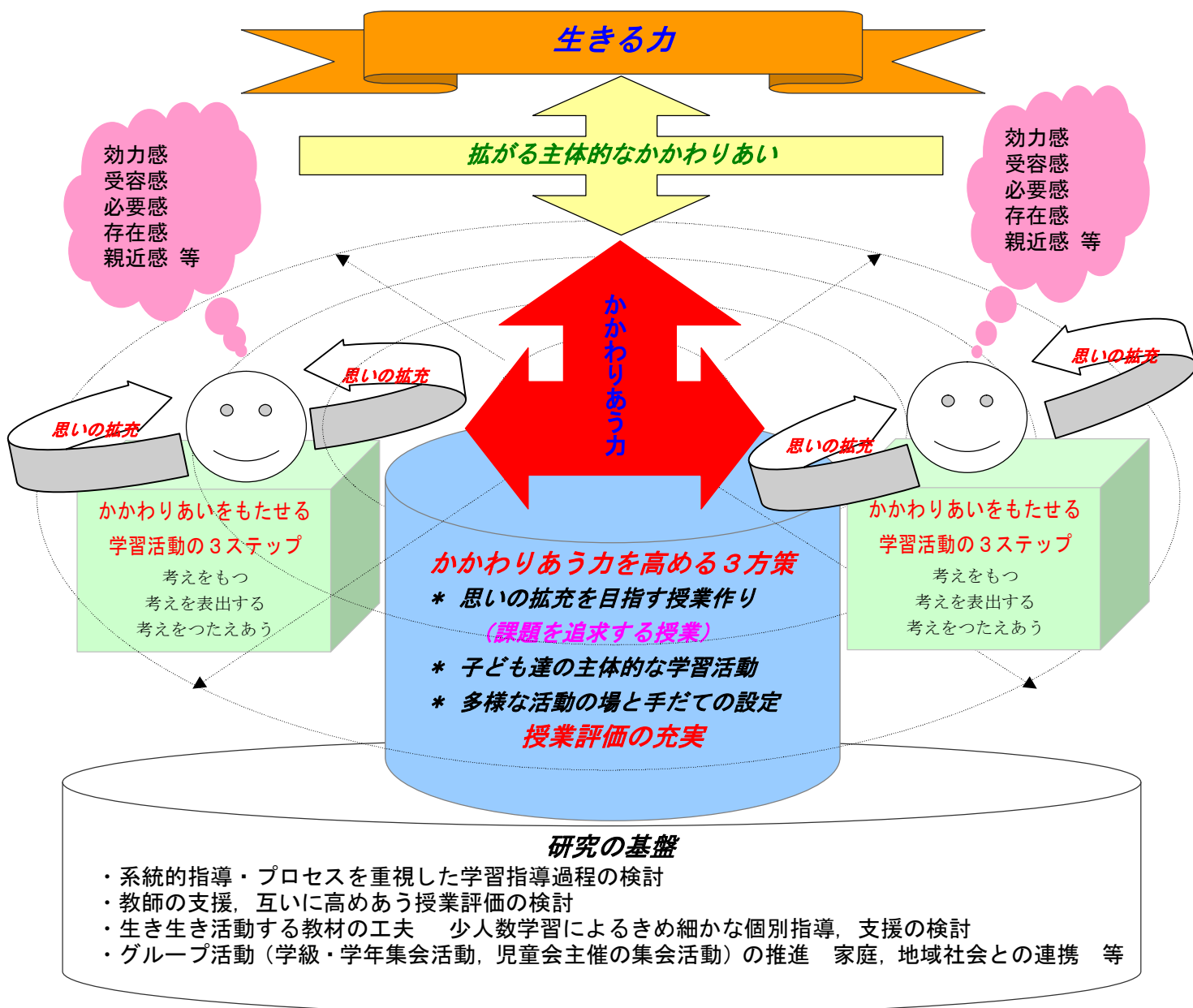
**『学習課題を追求する力を育てることが、**

**主体的にかかわりあう子どもの育成につながるであろう』**

## 4. 研究の構造

副題の「課題を追求する授業」をどのような研究構造の基に具現化するのか。

学校生活全般を通して、子ども達一人一人に目を向け、個が共に生きる学習活動を前提にしながら、個の思いが拡充する授業の展開と、考えをもった個々がかかわりあう場の設定に重きを置き、次のような研究の構造を想定した。



## 5. 今年度の基本構想

- (1) 子ども達が興味・関心をもって、意欲的に「考えてみたい」「やってみよう」と思える学習環境を構築する授業研究の推進
- (2) 学年間の学習指導の系統性、具体的な成長の姿の見える学校研究の推進
- (3) 校内研究を進めてよかった、協力し合えてよかったと実感できる協同研究の推進

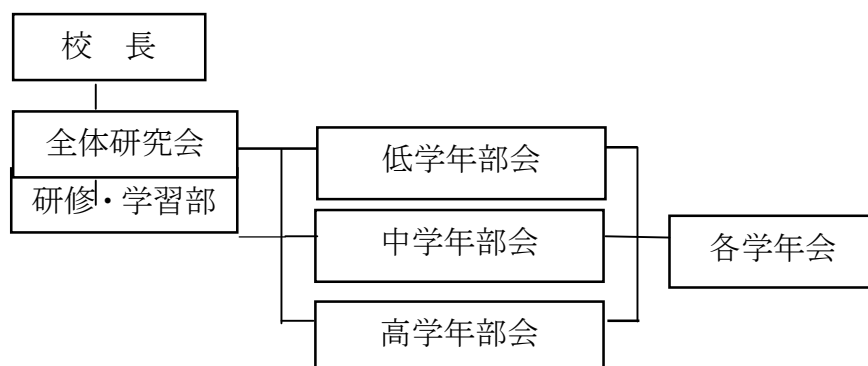
## 6. 今年度の研究の内容

- (1) かかわりあう力の基本である「話す力」「聞く力」の育成を重点と考え、学びの姿の定着を図りながら、身に付けさせたい知識、技能を授業を通して系統的に指導・支援していく。
- (2) 子ども達にどのような力がついたのかを判断する「授業評価」をもとに系統的な指導計画の具体化をめざす。
- (3) 授業では、段階に応じた多様な場の設定、手立てを工夫し、「課題を追求する場」「か

かわりあう場」を大切にした実践を積み重ねる。

## 7. 研究推進組織と進め方

### (1) 研究組織



- ・ 研修・学習部 研究内容，方向についての原案を作成する。
- ・ 全体研究会 全体で授業を中心に話し合い，研究の方向付け，拡充を図る。
- ・ 各部会 部会内つながりを深め，校内研究を進める。
- ・ 学年会 学級作り，教材研究等について話し合う。

### (2) 進め方

#### ① 学年，部会を中心に研究を進める。

- ・ 児童の実態に合わせて，日常的に教材研究を行う。
- ・ 学年研究会，ブロック研究会の設定を行う。
- ・ 級外はいずれかの部会に所属する。

#### ② 研究授業

- ・ 教育力向上のために，お互いに研鑽し合う機会として，全教員が研究授業を行い，授業整理会を持つ。
- ・ 全体研究授業は，各学年で年に1回行い，授業整理のための全体研究会を持つ。  
(12月下旬までに行うことを原則とする)
- ・ ブロック研究授業は，全体研究授業を行わない教員が年に1回行い，授業整理のためのブロック研究会を持つ。  
(12月下旬までに行うことを原則とする)
- ・ 研究授業の時期が重ならないように，研修部が調整する。
- ・ 授業者は事前に指導案を示し，簡単なオリエンテーションを行う。

#### ③ 全体研究会

- ・ 研究授業の検討や整理，校内研究の方向付けやまとめを行う。
- ・ 学校として子ども達にどのような力をつけさせるのか，そのためにどのような手立てが必要なのか等を話し合う機会とする。
- ・ 必要に応じて講師を要請する。